

あたたためて

〈家庭の同行24〉

引きださされる力



NPO 法人くだかけ会代表

和田重良

1948年小田原市生まれ
くだかけ生活舎での共同生
活(人生科や農作業)を
おして、青少年や家庭の生
活にさまざまなメッセ
ジを送っている。

頭のそのまた奥に

人間に「頭」ができたのはいつ頃からだろうかとか考えたら、つい「プフュー」と笑い出しそうになりました。頭があるからこんな変なこと考えるのです。

また、「人間」とか「人」とか名づけたのは誰なんだろうと考えたらまたちょっと変な気がしてしまいました。当り前過ぎてどうでもいいことなので

すが……。

人間だけが頭の中で「ゴチャゴチャ」と

ぼくは今、『禅の友』という仏教誌に「人・自然・魔法の薬」というテーマで、『びっばら』という仏教誌に「答えのない宿題」というテーマで連載させてもらっています。

どちらも実は「くだかけ」で日々テーマとして実践していることとまったくひとつです。『くだかけ』では「あたたためて引き出される力」という連載にしているのです。

で、ぼくが一大テーマとしていることは究極「自分」という問題を一步も離れられなくなっているこの巨大な「頭」をどのように扱うかということなのです。

どうして、こんなことを飽きず懲りずにしつこくやっているのかと言うと、当たり前と思っていることのそのまた奥に本当のことがあると思うからなのです。

特別な難しいところに本当のことがあるわけではなく当たり前その奥にあるのです。犬やニワトリは当たり前を当たり前として暮らしていきますが、人間の頭はゴチャゴチャと考えるの

でそこを超えてみる必要が出てくるのです。

頭の限界の向こう側に

現代人は、中途半端な頭をさらに半端に教育されているので、なかなか「頭の限界の向こう側」に気づけません。

要するに知識ばかりはたくさんありますが、「知恵の世界」に気づけないのです。

「苦楽一元」とか「苦楽一如」とかぼくは言っていますが、頭を超えてみたら苦も楽も一つなのですが、日常は苦を避け楽を求めようと頭の中でゴチャゴチャやっています。

もちろん人間の頭が苦を避け楽を求めめるには理由があります。その方が快いと思うからです。でも事實は必ずしも楽することが快いとはなっていないのです。

快いの基準は「いのちの満足」というところにあるのでなければなりません。精一杯、力一杯の勉強やスポーツや仕事は苦も楽も含んだ「いのちの満足」なのです。

「約束」したくなる親や教師

言葉や文字で「おやくそく」をして、それを守ら

せることが「教育」だと思っている親や教師がたくさんいます。

そうして約束を破ったと言って子どもたちを責めるのですが、こういう「約束」はどんな効果があるのでしょうか。他の方法で努力を推進することはできないのでしょうか。

約束ではなくても「ああ言った」「こう言った」ということで相手を買めたりします。

これは人間の頭の特長をシッカリ把握していないのです。

人間の頭は「自分」というもので支配されています。「自分」をどう捉えているかで見えている景色が違います。ですからどのようにでも空想しウソを言っていけるようになります。また、交換条件を出して取り引きできるようにもできています。そこを受け取り損なうと「人間の教育」は「約束」で完結すると思ひ込むのです。

意欲や努力は「欲望」にその根っこがあるわけで「約束」には頭の限界があるのです。

計画通り、予定通りにならないこと

科学文明の一つの特長は「思い通りにしたい」ということで進歩して来たということです。

親が子どもを「思い通りにできる」と思ってしまうのは、科学的思考の結果です。

親は子どもの成長を「計画通り、予定どおり」に行くものだと思ってしまうのです。

そんなの本当は無理なのです。科学文明のもう一つの特長は余計な「不安」を生んでいくというものです。これも「計画通り、予定通り」の結果です。

ではその反対はなんでしょうか？

ぼくは「宗教的あんしんの生活」だと思っています。柔軟に対応できるための親の心の柔らかさは「科

学」の対極にある「宗教的思考」というものなのです。どちらも甲乙つけ難く、人間の精神活動には両方がバランスよく存在している必要があるのです。

人間の「快」と「悦び」の中には科学的思考と宗教的あんしんの両方が必要なのです。

知に片寄って硬くならず、情の世界でより悦びを深めるといふことです。

宗教的あんしんの生活は「計画通り、予定通り」に行かない時の不安や悩みまでもまるで「出たところ勝負」のようにアッサリとしっかり受けとめていける力を引き出していけるのです。

自然の風景

山遊び

足の前にふくらみかけた蕾の lindow がある。灰色の岩にもたれかかるように生えている。リューノウギクはもう無数の蕾を綻ばせかけている。

アフリカの山奥のどこかにも、この lindow やキクのように、何百代、何千代という世代を経ていま赤い花、黄色い花を咲かせている野草があるだろう。

lindow の色づきかけた蕾を何心なく眺めていると、永遠とか無限とかいうものの中に無数の色と形、の光が音もなく明滅するのが見える。合掌して、大きないのちの創造のはたらきを拝むばかりだ。こんな山遊びでも楽しい。

和田重正著「山あり、花咲きて 父母いませり」より

